
真・女神転生? 走り行き着く先

天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・女神転生？ 走り行き着く先

【Nコード】

N1956M

【作者名】

天

【あらすじ】

「東京受胎」

世界は生まれ変わるためボルテクスという卵と化す。不運にもそれに巻き込まれ悪魔となった少年。

「メノラー」を巡る魔人たちとの戦い。

その行き着く先とは――・・・

ゲーム『真・女神転生？ NOCTURNE マニアクス』

アマラ深界第3カルパにおけるイベントを元に書かれたものです。

PV1300、ユニーク700突破了。
ありがとうございます！

走り行き着く先・1

一つだけ、彼にはわかった事があった。

メノラーを持つ魔人たちは死神だという事。

どの魔人も髑髏のごとき顔をして、彼に死を突きつけた。

ただ一人だけ違うものもいたけれど・・・

アマラ深界第3カルパ地下3階。

階段を下りた先、扉を開けてゆつくりとやって来るその魔人を、人修羅と呼ばれる少年は見据えていた。

人のような姿をして、人ではありえない力を振るうその魔人を。

例えいくら人間に見えようと、デビルハンターを名乗るその男は、悪魔にとつての死神に他ならないだろう。

他の魔人がまだ人として、心底悪魔にならぬうちに死ね、と言うのに比べ、その魔人は少年にとって余程たちの悪いものだった。

悪魔としての死を、少年に突きつける。

その背に負った大剣で。

もしくは、言葉と共に、少年へと向けられる、その銃で。

「来たな、少年・・・・・・・・」

また会えると思つてた・・・・・・・・

3階へ降りた途端、揺らいだ少年の持つメノラー。

魔人がいることは、感じていた。

でもまさかそれが、この赤いコートを羽織った魔人だとは。

予想だにしなかった事に、呆然と身を強張らせた少年に、なおも魔人、ダンテは告げる。

「・・・・・・・・」 大当たり”って奴だな

少年はきり、と唇を引き結んだ。

初めてこの男と会ったとき、マントラ軍本営から飛び降りてくるという破天荒な登場をしてくれたあの時、味合わされた屈辱を思い出していた。

それは男の身に着けたコートのように、鮮やかで、それでいて暗い、少年の胸を燃え焦がするような記憶だった。

瞳を金に輝かせ睨みつける少年の眼差しをものともせず、男はゆったりとした動作で、少年の背後へと回った。

その黒々とした銃口と、アイスブルーの眼差しを少年へと注いだまに。

「細かく説明する気はないぜ・・・」

男の移動にあわせ、少年も身を反転させた。

金の瞳は、決して男から逸らさなかった。

「・・・だが薄々感じてるはずだ」

少年の目に宿る、全身から放たれる殺気を気にする風もなく、男は話を続けた。

「あのジジイの目的が

『魔人同士の殺し合い』って事くらいはな」

今まさにお前がオレに向ける殺気こそが、ジジイの望みなのだ、と言わんばかりの口調だった。

殺気の原因は、誰かの思惑というより、男こそが、少年に味合わせた痛みと怒りの対価だったのだが。

「その結果何が起るかは知らねエが

言いなりになつて踊らされるほど

間抜けじゃないだろ？」

そうして嘲笑うかのように続ける。

いやそれは少年の男に対する印象が、そう見せただけなのかも知れなかった。

男はその表情を、少しも変えてはいない。

「なら、後ろを向きな。

そして振り返らずに走れ」

だが間違っている、と少年は思った。

老人の目的はきつと殺し合いではない。

その目的は多分・・・

「僕を殺させること」。

「お前が取るべき選択肢はそれだけだ」

だから男の告げる選択肢が、少年にはわからなかった。

死に背を向けて走れという事なのか。

それとも、この先へ進むことで得られるだろう、真実から目を背けて、逃げろという事なのか。

だから少年は、

「……そうだろ、少年？」

そう尋ねる男に、首を左右に振ることで応えた。

どちらにしても逃げれない。

逃げてしまったら……少年は、もう自分には何もなくなってしまう、とそう思っていた。

「……オーケイ、わかったよ。」

ならこの先に、お前が足を踏み入れた瞬間……」

男は一度、少年から視線を落とした。

それを疑問に思う間もなく、動かされる銃口。

「ズドンッ！だ」

はじめて会ったときに、身を持って味合わされたその痛みを思い出し、少年が反射的に硬直してしまったのを、ふ、と笑い、男は銃を引いた。

「遊びの時間は終わり。」

ここからは……」

そうしてもう一度、両手に持ったその銃を、少年へと向ける。

「……ショウタイムだ！」

走り行き着く先・2（前書き）

この文章はゲーム『真・女神転生? NOCTURNE マニアクス』アマラ深界第3カルパにおけるイベントを元に書かれたものです。

走り行き着く先・2

突きつけられる二つの銃口。

咄嗟に身構えた少年に笑みを向け、男は現れた扉に、再度その姿を消した。

口の端だけに浮かぶ皮肉げな笑み。

てつきり撃たれると思った少年は、その身体から拍子抜けしたように力を抜いた。

自分を叱咤するように再度気合を入れ、男に続いてアマラの丸い、扉を潜る。

自動ドアのように開閉するその扉が、背後で閉まる音を聞きながら、少年は油断なく視線を辺りに配らせた。

トンネルに似た印象を受ける閉塞された通路。

だがどこに光源があるものか、うすばんやりとしてはいたが、視界が極端に阻まれるほどではない。

どこからか、視線を感じた。

男は未だ近くにいるのだろう。

姿を探す少年の耳に、男の冷やかすような声だけが届く。

「・・・・・・楽しませてもらおうか、少年？」

・・・どこに？

戸惑う少年のすぐ横を、風切り音が通り過ぎる。

それは少年の頬を割いて、背後の扉に突き刺さった。

銃弾。

ぎよっとして飛来した先を見ると、暗い通路の向こう、男が銃を構え、ゆっくりと歩いてきていた。

赤いコートは視野の届かぬ闇に、溶け込んで見えた。

その赤い闇から唐突に生じる黄色い光。

光は銃より弾を生じ、今度は少年の脇を裂いた。

「うっ」

短く唸り、少年は逃げを打つ。

間近にある通路へ入り、駆け抜ける。

背後を追ってくる銃声。

だが通路はうまいことにゆっくりとしたカーブを描いており、少年に次なる衝撃を与えなかった。

そのまま目に入った扉に駆け入って、少年は短く息をついた。

銃弾に引き裂かれた脇を抑える指の間から、滴る赤。

姿を現さず、間近で待機状態にある仲魔に、回復を頼んだ。

頭に響いてくる案じる声に

「大丈夫だよ」

少年は根拠なくそう応える。

本当は、あの魔人から逃れられる自信はなく、また勝てる気もしなかったけれど。

はじめて会ったあの時に、味合わされた苦痛と怒り、悲しみ。

本当ならリベンジといきたいところだったが、相変わらず男の存在感は圧倒的で、少年に力の差を感じさせずにはいられなかった。

「…………ゲームは公平でなきゃ面白くねエ。

俺が得た情報をやるよ」

一方的なこの追いかけてこも男にとってはゲームでしかないのか。

扉にもたれかかった姿勢のままその声を聞いた少年は、今は仲魔のおかげで塞がった脇に無意識に手をやり、瞳を翳らせた。

「その先はスイッチを全部切らないと、

ゴールできない仕掛けのようだ」

ゴールとはおそらく、先へ……アマラのさらに奥深くへ向かうための梯子か何かのことだろう。

男の言うゲームがどんなものだが、少年には未だよく掴めていなかったが、恐らく男を出し抜きゴールしてみる、ということなのだろうと理解した。

「…………3つ数える時間をやる。

よく頭に叩き込んだときな」

視界にあるのは、まっすぐ伸びた通路、そして右へ曲がる通路、その先に同じく右にある扉。

スイッチがあるなら部屋の中だろうと予測して、少年は扉を潜ることに決めた。

「1・・・・・・・・」

男が告げるカウンtdownを聞きながら、身を預けていた背後の扉から背を起こす。

「2・・・・・・・・」

走り出す。

男の姿はない。

「・・・・・・・・3！」

扉へと滑り込んだ。

やはりそこは部屋になっていて、さらに中に二つの小部屋があった。透明な壁に囲まれたその中には、オブジェのようなものがあり、その上部が燃えるように光っている。

恐らくそれがスイッチなのだろうと、少年は中へと飛び込んだ。手をかざしそれを切る。

小部屋の中で、もう片方もいけるかと、少年は視線をもう一方へと向けた。

男の姿は見えない。

待ち伏せていても良さそうなものの、とは思いつつも、小部屋から走り出る。

スイッチの未だ起動する小部屋に間近に迫ったその時、少年の視界に赤いコートが現れた。

やはり待ち伏せられた！？

その登場はあまりに唐突で、どこに潜んでいたものかも、少年にはわからなかった。

身を翻す間もなく、仕掛けられる攻撃。

戦いを見て、姿を消していた仲魔たちが現れる。

クー・フリーン、サティ、クイーンメイブ。

かつて猛犬と呼ばれた白い鎧を着込んだ槍使いの幻魔と、炎に包まれた黒衣の女神、そして仮面のように表情の見えない、マントの女性だった。

予想済みだったのか、にやりと笑った男は、背から抜き放ったその大剣を、迷わず女神へと向けた。

振り下ろされる剣を、避けきれずその身に受ける女神に、少年は声を上げた。

「サテイ！」

案じつつも、一撃なら耐え切れるはず。

その思っていた少年の予想むなしく、女神は地に倒れ、姿を消した。目を見開く少年の横で、次は白鎧の青年が剣を受ける。

耐え切った幻魔は、少年を守るように身を乗り出し、カウンターを放つ。

だがそれを気にする風もなくその身に受けながら、男は少年の腕をとった。

ぎょつとして暴れるのを、無理に引きずり歩き出す。

「放せ！！」

「主様から離れろ」

「放しなさい！」

口々にそう叫ぶも、少年との位置が近すぎて、攻撃をするに出来ない仲魔をよそに、男は少年を引きずったまま、悠然と扉を潜った。

掴まれた腕にかかる力が強すぎて、なかなか集中できず、思うように力が発動できない。

それでも通路を無理やりに歩かされるうち、冷気も凝ってきた。

男に向け放とうと、無理な体勢のまま、掴まれていない方の腕を持ち上げようとしたその時。

唐突に少年は腕を放され、放り出されるように通路に転がされた。

それは、カウントダウンを聞いた扉の前だった。

仲魔たちが追いかけてくる。

「どうした・・・少年。」

もうバテたのかい？」

鼻で笑う男の声。

最初からということなのだろう、殺気だった仲魔たちを気にもかけず、再び男は去っていった。

走り行き着く先・3（前書き）

この文章はゲーム『真・女神転生? NOCTURNE マニアクス』アマラ深界第3カルパにおけるイベントを元に書かれたものです。

走り行き着く先・3

「っ……」

放り出された拍子に、壁に強かに背を打ち付けた少年は、そう呻いて身を起こした。

「主様、お怪我は？」

白鎧の青年は片膝をついて、主君の全身に視線を走らせる。

自分こそが、魔人の振り下ろす大剣をその身に受け、決して軽くはない傷を負っていた。

マントラ軍本営前で、かの魔人と主君たちが相對した事を知るこの幻魔は、赤いコートの男が容赦なく他者を、悪魔を打ち据える事を知っていた。

今しがた、燃える黒衣の女神、サティがそうされたように。

「大丈夫……」

ゆるく頭を振った後、掴まれていた片腕をさすった少年は、視線をやったそこに、しっかりと男の大きな手形が赤く残されているのを見て顔をしかめた。

「許せないわ、あの男！」

仮面を思わせる目しかない顔を持つマントの女性は、男の去った方を見ながら、小さな妖精の頃を思わせる口調で罵詈雑言を吐き、ぱりぱりと周囲に電気を放出していた。

「クシナダちゃん、サティの蘇生をお願い」

間近で待機状態にはないものの、自分の力及ぶ空間で呼ばれを待つ地母神の女性に、少年は短くそう頼むと、小さく息を吐いた。呼ばれを受け、蘇った女神は、膝について主君の前に控える。

一撃の元に倒れ伏した自分を恥じていた。

「ごめんね、サティ」

情けのない顔をして謝罪する少年を勢いよく振り仰いだ女神は、慌てたように首を振った。

「貴方のせいではありません」

「しばらく、休んで」

少年の言葉に、女神は目を見開いた。

醜態を晒し、見放されたのかと。

「後でまたお願いしたいから、ちょっとだけかもしれないけど」

主の何か困ったような笑顔に杞憂を知り、女神は力を抜いた。

それならば、逆らう理由はない。

「はい」

女神は頭を下げた。

「回復だけ頼めるかな？」

同じく剣をその身に受け、肩を負傷した青年に視線をやった少年の頼みを受け、女神はメデイラマを唱える。

暖かな光がその場にいた全員を包み、瞬く間に幻魔の傷も、少年の背の痛みも消えうせた。

「ありがとう」

女神に笑顔を向け、小さく片手を振って召還状態から開放した少年は、代わりを誰に頼むかと思案する。

「じゃあ・・・ロキ」

名を呼ばれ現れた魔王は、紫色の肌をして、マントに褌という奇天烈な格好をしていた。

「はっ、やっとオレを呼んだかよ」

この居丈高さなら、ちよつとぐらい怪我されてもあまり心は痛まないから、という理由は、少年の胸に秘められた。

どうせならクイーンメイブも・・・

「私はひっこまないわよ」

狙い済ましたかのような声に、少年は苦笑して頷いた。

「わかってる」

差し出された幻魔の手をとって、そこでようやく立ち上がった少年は、うーん、と小さく声を漏らした。

あの部屋へ行くには、やはり一度戻らなければならぬだろうか。

どう考えても、あの男が待ち伏せている気がするが……。

「……行くしか、ないよな」

ため息。

「待機してて」

お傍に、言いかけた白鎧の青年を少年はその笑顔で止めた。

「みんなで走ると、誰か遅れたりしたら危ないし、ね」

肩をすくめ、魔王は姿を消した。

「怪我したら、すぐ呼ぶのよ!」

テンションの下がらない夜魔の女性は、大声で少年にそう告げつつ、引っ込む。

残った幻魔も、臣下の礼を取ると、姿を消した。

もう一度息を吐く。

「さて……行くか」

走り出した少年は、真っ直ぐに部屋の扉を目指す。

待ちかねたように聞こえる銃声。

弾かれたように少年はUターンし、途中あった曲がり道を勢いよく曲がった。

追いかけてくる高く重い音。

衝撃が背に走り、反射的に身体が跳ね、足が止まる。

でも、立ち止まらない。

立ち止まれば、背後から迫る赤い死神に、また仲魔たちが傷つけられてしまう。

身体を傾がせるようにして走ることを止めない少年の背に、次々と与えられる熱された鉄の塊。

衝撃に何度も跳ね上がる身体を押さえつけ、少年は前へ、前へと足を動かした。

内部をも傷つけられたのか、唇から血の線を描き、背からだくどくと赤を流れ出させながらも、少年は通路を走る。

正面に見えるワープゾーンは避け左へと曲がり、回りこんだ形になる部屋の反対側にも、扉はあった。

その向かいには、ゴールだと思われる、赤い光で封じられた扉。願うような思いで部屋へと入り、さらに、スイッチの小部屋まで。走りこんだ先で、勢いを殺せなかった少年は、そのままスイッチの台座へと突っ込んだ。

どん、と重い音。

痛みを感じる間もなく、倒れ伏す。

少年の背から、貫通したものが腹からも、流れ出る赤が小さな空間の地を染めあげた。

台座にしがみつき、這いずるように半身を起こした少年は、腹を押さえて何度も激しく咳き込み、血を吐いた。

その中に、小さな鉄の塊が混ざっているのを、少年は目にした。

「は………っ」

肺から抜けた様な息をついて、凭れかかった台座からずると再び地に沈む少年の前に、戦闘でも、呼んでもいないのに現れる白い鎧。

「主様！」

青年がメディアラハン、と唱える横から、次いで現れた魔王が、少年の身を引き起こした。

「アンタね、死ぬ前に呼びなさいよ！」

口がないはずの女性が漏らす、激昂したような声。

血の気を失った白い顔で、少年は力なく笑った。

「クイーンメイブには怒られてばっかだ」

幻魔が生み出した癒しの力は、赤い死神が少年に与えた傷を瞬く間に塞いだか、失われた血液までは補われない。

まるであの男を彩る赤に加えられたかのように。

片腕を魔王に支えられた姿勢のまま、少年は薄くまぶたを伏せた。

「でも、もうちょっとだから」

魔王に力を借り、膝裏に力を入れて立ち上がる。

背後のオブジェを振り返り、スイッチを切った。

これで扉は開放されただろう。

視界を阻まない透明な壁ごしに視線を彷徨わせると、もう一方の小部屋の前、見える悪魔狩りの姿。

「もうちょっとだから」

その悠然と佇む、赤いコートから視線を放さないままに、少年はもう一度繰り返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1956m/>

真・女神転生？ 走り行き着く先

2011年5月30日19時58分発行